
ナルト～1回目の転生～

ルリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ナルト〜1回目の転生〜

【Nコード】

N7975X

【作者名】

ルリ

【あらすじ】

転生させられる話。

作者の暇つぶし

プロローグ

「ここはどこだ？」

見渡すと辺り一面真っ白の空間にいました。

「ワンワン」

「お前あの時ひかれそうになった犬か。

確か今朝は会社行くために早めに出勤。

女の子と犬が車にひかれそうだったから、助けた後ひかれたのか。
親2人とも俺を捨てて孤児院では厄介者扱い。」

パアーン

「さて回想は終わった」

突如出ててきた。幼いよう

「幼女言うな」

失礼。女の子がそんなことを言った。

「誰だ？」

「私は見習いの神でルキよ。」

「なぜ神が会いに来る？」

「実は、私より上の神があなたのはるか前世からの運を奪い
あなたを不幸にしていたんだ」

「なぜそんなことを？」

「あなたのたまりにたまった運を自分のものにし次元神になるため
やったんだけど

その神を多くの神が捕縛した時にはあなたの運を元に戻した時は
すでに遅く

死んでいた。

元に戻そうと思ったんだけどあなたの魂は魂がランクUPし、
世界が受け付けけないの」

「なるほど。所で次元神って？」

「次元神というのは次元をつかさどる神のことです。

さてあなたには転生してもらおうよ。

残念ながら拒否権はないよ。

後さまざまな世界を渡ってもらうよ。

転生させるごとに毎回能力が付与されるよ。

後、前世の記憶は知識と技術に関しては思い出せるけど
人間関係については忘れてもらうよ。

あなたの転生の能力はお詫びを込めて3つ付与されるよ

このカードから引いてね」

まずあなたの能力は

1 転生させるごとに前世で使えた能力などが使える。

ただし転生させる世界ではその類がなかった場合似た力に代わ
る。

身体能力は転生した体に遵守される

- 2 七実の見稽古
- 3 とある魔術師のインディクスが持っていた完全記憶能力

次は犬君ね

- 1 転生させることに前世で使えた能力などが使える
ただし転生させる世界ではその類がなかった場合似た力に代わる。

身体能力は転生した体に遵守される

「記憶は3歳になってから徐々に思い出すから

最終的に18歳で前世の記憶を完全に思い出すから、

転生先はNARUTOの世界に似た世界だから原作ブレイクOK。

じゃあね。」

という言葉とともに黒い穴に落ちた。

目が覚めたら、

真っ暗だった

それも牢屋の中にいた。

「グルグル（なんでだ）」

「グルグル（声が変わだ）」

グル・・・ア・・・ア・・・い・・・コウやったら声が出るのか」

しかしここどこだ

聞こえてくるのは、話し声だけだな

話し声？

耳を澄ますと

「やはりあ奴らを引き離すしかない」

「はい。それしかありませんね」

「しかし」

「ヒルゼン。お前も分かっているだろ。あの子は人柱力だ。

「里で、管理すべきだ。」

「分かっておる。ダンゾウ」

「ならば、どこで育てるかだが」

「ワシが二人とも預かるう。そして、3歳になったとき一人暮らしをさせる

それなら問題ないだろう」

「それならいい」

このパターンで行くと、オレ双子のどっちかなのか？
なんで牢屋なんだ？

あれから4年がたった。

あの双子は3歳になっていた。

あの話し合いの結果。

二人はひきはがされた。

二人とも、人目をばからず泣いていた。

「あのさ　．．．大きくなったら会いに行くから、そしたら結婚しよう」

「ほんと。お兄ちゃん。じゃあ待っている」

「ああ。」

その後二人して、指きりをした。

俺は、あれからいろいろ検証したらあの双子じゃなかった。むしろ人間ですらなかった。

それは

．．．

狐だった。

それも尻尾が9つあった。

あれ、俺．．．九尾。

なぜだ

神は死んだ。

じゃなくて本当にどうしよう。

恋人作れない

・・・待てよ。同じ狐と恋人になれというのか。

というより、こいつに仲間いるんだろうか

どうもあの双子の一人に宿っている。

主人公違設定

九尾（中の人）

目が覚めたら、九尾に憑依または転生した。
この世界で、10尾を除いたら最強の1匹。
宿主との関係は、良好

うずまきルリ

九尾の人柱力。

才能は、ミナトには劣る。

九尾との関係は、良好。

里の人間との関係は、原作より悪い。

結婚の約束は覚えていない。

おぼろげながら兄がいたなのは覚えている。

波風ナルト

原作の主人公。

ミナト並の才能とクシナには劣るがかなりの潜在チャクラがある。
幼少のころ、結婚の約束をした。

波風ミナト

九尾（中の人）を封印した人。

4代目火影。

原作と違うのは4代目の魂は封印されていない。

うずまきクシナ

九尾の人柱力だった人物。

原作と違うのは魂を封印されていない。

猿飛ヒルゼン

3代目火影

変わりなし

志村ダンゾウ

根の首領。

変わりなし

ルリが6歳になったころ。

ナルトが里を抜けた。

たくさんの人が探したが見つからなかった。

「エーーン、エーーン」

俺に抱きつき泣きだす始末。

こいつにナルトが兄だということ教えた覚えがないが、気づいてい
るのか？

まあいいか

3時間後。泣き疲れたのは寝た。

「フワー
」

俺も眠い。

寝よう。

こいつ。机の上で寝てやがる
仕方ない

ドローン

というとルリの寝ている机に赴きベットで寝かせた。

ドローン

と消えた。

ルリが泣きだしてから半年が過ぎたころ。
うちは一族が全滅した。

月日がたつのは早いもので、ルリは12歳のなりアカデミー卒業試験を受けた。

とはいえ、見事合格だった。

そうそう。俺が出来ることが増えた。

ルリからアカデミーの術を学んだら出来た。

後、九尾の前の人格から記憶を探れるようになってそれ以外にもできるようになった。

ルリが帰り道

「ほら例の子合格した見たよ」

スコーン

石を里の人間を投げつけられた。

「・・・いたい・・・」

「お前なんかいなくなれ」

そっさい里の人間は罵詈雑言を言った。

ルリは、トボトボと帰っていった。

ハア―

最近。ルリの笑顔を俺との触れ合いでしか見ていないな。
さて、どうしたものか。

俺が助けてもいいが、手助けはダメだと言われているだよな。

原作と違いミズキの事件は起きなかった。

電波を拾ってしまふ。

最近多いな・・・電波を拾うの

班は、ナルトの代わりにルリが入ったこと以外変わらなかった。
カカシの鈴とりは、ルリがチームを組もうと言ったが

「俺は、一人で取る」

「サスケ君と組むの。むしろルリあんたとなんてありえない」

と言われ断られた。

結果。

ルリは、幻術を食らったが俺がといたため無意味だったため

体術に切り替えられ、意識を失わないように何度も殴った
りけられた。

サスケは、カカシに千年殺しを食らい忍術で埋められた。

サクラは、幻術にかかった。

カカシの奴、憎しみが、半端ないな。

2度目の時合格した。

「でね。意外と痛かったよ」

「そうか。だが、よく頑張ったな」

ルリの頭をなでたら気持ちよさそうに笑っていた。
ここ最近、精神世界で寝まくりだな。
ついでに、カカシに付けられた傷は全部治した。

カカシの試験の合格してから、さまざまな任務をやっていた。カカシ班が受けた任務は波の国の任務だった。

途中水たまりがあったので、ルリには警告しておいた。

初めての实战で動けなくなったサクラをかばい多少怪我をしたルリがいた。

怪我をした所を見てサスケが蹴りを入れカカシがとどめを刺し拘束した。

その際、カカシのルリを見る目が尋常じゃなく冷たかった。

そのまま、波の国に出発した。

ザブザというやつが襲ってきたが、カカシが無様にも捕まった。

こいつアホだな。

と思った。

サスケと協力して何とかカカシを助けられた。

「サスケ。ありがとな」

とお礼を言っていたが、またもやルリは無視されていた。

原作道理ザブザの仲間が助けに出た。

それを木の上から見ていた。

木の上から見ていた人視点

畑カカシか

あいつも一緒か。

ダンゾウも殺そう

ルリを見る目は優しかったが、カカシ達、木の葉を見る目だけ冷たかった。

原作道理に木のぼりをやらされた3人組。
その光景を影で見っていた木の上にはいた人物。

1週間後

ようやく木登りが出来たみたいでグテツとしていた。

時は進み。

白から受けた千本をルリはサスケをかばい

バタ

と倒れた。

サスケは写輪眼を開眼したが、白に負けた。

「とどめです」

とサスケに千本を突き刺そうとした所。

バコーン

白に向かい黄色い残滓が当たり死んだ。

「いったい何が」

と震える声で呟くサスケがいた。

その際ルリに刺さっていた千本が無くなっていた。
ザブザはカカシに殺された。

ガトウ一派は、村の町民たちの頑張りで撃退された。
こうして、波の国事件は解決した。

7 (前書き)

九尾(中の人)が戦うことではないので、
見てるだけにしかならない

波の国事件を終えた第7班はDランク任務を頑張っ
てこなしていた。1回ほど他里の滝隠れのD
ランクの任務がBランクの任務に代わる
事件があったが

成長したルリとサスケによって何とかな
ったみたい。

しかし、白を倒した黄色の残滓はあいつ
か？よく成長したものだな

時は流れ中忍選抜試験を受けた。
その試験会場に行く前にロック・リー
の妨害を受けサスケがダウン
した。

試験会場に行き、そこにルリを除く皆
が旧交していた。第1次試験は、問題
なく合格だった。たとえばそれが白紙
の回答でも

いいのか木の葉よ。

・・・と突っ込みたいところだが

2次試験は、死の森での巻物の奪い合
いだった。数時間後。

突然どこからか突風が吹き全員吹き
飛ばされた。ルリが後ろを向いた先には
大きな蛇がいた。

キーン

「・・・硬い」

クナイを振るが、全く手ごたえがなかった。

シュ シュ シュ ドコ

「キヤ」

ルリの手裏剣は全く齒が立たなかった。
逆に攻撃を受けて避けていた。

「エイ」

かわいらしい掛け声で、手持ちの起爆札を

ドコーン

すべて爆発させた。

見ると、蛇は倒れていた。

「皆の所に合流しないと」

急いではなれるルリがいた。

それを見届ける仮面をかぶった男がいた。

仮面をかぶった男SIDE

「フウ・・・気づかれなかったか」

起爆札の攻撃で倒されていなかった蛇をすぐさま
ルリに気づかれずに気絶させた男がいた。

それもパンチ一振りで

これこそ俗にいう馬鹿・・・ゲフンゲフン・・・
失礼

桜花掌

である。

ルリSIDE

見るとサスケ君がオロチマルに首筋を噛み突かっていた。

「それにしてもよく無事だったわね。ルリちゃん。

あの大蛇を突破してきたみたいね」

「行きます」

ルリVSオロチマル

のバトルになったが、ルリ自身に決め技がなかったせいで
短時間で決着がつき、吹き飛ばされた。

ヒューン ドコ

「・・・カハッ」

ルリの体を舌で拘束して、チョウチョヨなく服を

ビリビリ

と破いた。

ルリの上半身を見て

五行封印

をした。

「カハッ」

ヒューン

パフ

木に当たる所を抱きしめられていた。

目がぼやけながら見ると

・・・黄色い髪が見えた。

「・・・誰」

暖かい？

見ると、マントを着せられていた。

目に暖かいものがあふれ、なぜか懐かしい感じがした。

「今はいいから・・・寝ていて」

彼のことは信じられそう。

目が・・・重い

この手を放したら・・・いなくなりそう

ギョ

としたら相手が驚いていたが
私を撫でながら

「大丈夫・・・ここに居るから」

そこで意識を手放した。

「あなた・・・誰よ」

サクラSIDE

サスケがやられルリが吹き飛ばされた時抱きとめた男がいた。
見ると、黄色い髪の毛の仮面をかぶった男だった。

「あなた・・・誰よ」

その男は一瞥しただけで問いには答えなかった。

そればかりかルリをまるで宝物みたいにそつと木の上に置いた。

「で、・・・あなた誰なの」

と蛇の男が言うと

とんでもない殺気が黄色い髪の毛の男から漏れていた。

二人ともものすごい殺気を出し合い、森にいた動物達は急いで逃げ
ていた。

火遁 業火球の術

風遁 大突破

火の玉が突風に当たりすさまじい

バコーン

大爆発を起こした。

仮面の男は手裏剣を取り出し投げつけた。

手裏剣影分身の術

手裏剣がいくつも増えオロチマルめがけ殺到した。

ひらり

とかわされた。

オロチマルが口から剣を取りだした。

「草薙の剣か」

「正解よ。まさか下忍の身でこの私とここまでやりあえるとは木の
葉は原石の宝庫ね」

口寄せ チャクラ刀

仮面の男がとりだしたのは、美しい白い大剣だった。

「その剣は、まさか」

ここでオロチマルがその剣に驚き仮面の男が瞬身で接近し斬り付けた。

剣と剣が打ち合いっているうちに見る見るそのあたりの地形が変わった。

「グワー」

よろめいたすきに仮面の男が右手に丸いチャクラが形成された。

螺旋丸

オロチマルは吹き飛ばされた。

「ガハっ………クツ……今日の所はひいてあげる」

そういいその場から消えた。

ルリの元に行き、いつの間にかサクラとサスケだけ消えていた。

「仲間を見捨てて逃げたか」

そう呟き、彼女をお姫様だっこし安全地帯まで帰った。

「大きくなったな」

ルリを撫でながら、懐かしそうに言った。

パソコン

煙が出た先には、赤い髪の男が現れた。
それを見た仮面の男は

「お前は……九尾か」

「久しいな。波風ナルト」

「ああ。……ところで、里の奴らの……」

「ああ。かなり悪い」

「そうか。……俺は彼女を連れて行くことと思う」

「……」

「むろん。追手がかかるだろうが……問題は暁だが」

「暁？」

「ああ。お前たち尾獣を狙っている連中だ」

「ならいい方法がある」

「どんな？」

「特殊な影分身を使う」

「なんだ。それ？」

「ルリの血又は髪の毛を媒体にする影分身だ。その分身が死んだら術が解ける。陽動には成るだろ」

「なら、やってくれ」

「問題は、彼女を説得する方法と中忍試験をどう切り抜けるかだ。」

「それなら考えがある」

「・・・話せ」

「父さんの術を使う」

「・・・？・・・！まさか出来たのか」

「ああ」

「・・・ん・・・」

「起きたか」

「九尾に確か・・・誰？」

ズル

「俺の名前はナルトだ」

「ナルト君」

「ああ。とりあえず何があったのか話す」

ナルトは、何があったのかをルリに話した。
そして、

「・・・そんな・・・サクラちゃんやサスケ君が・・・」

茫然自失状態になった。

「里を抜けないか」

「・・・！・・・でも」

「俺は・・・お前が傷つくのは、見たくない」

「ありがとう。私はそんなに木の葉に思い入れがあるわけじゃない。
」

「だったら」

「里抜けの手引をしたらあなたが危険じゃない」

「俺は・・・大丈夫だ」

「でも・・・どうして・・・そこまで」

「俺はお前のことが好きなんだよ」

「・・・へ・・・え」

ボン

顔を赤くしたルリがいた。

「俺のことが信じられないのか」

「・・・あ・・・ちがう・・・」

ギユ

と抱き締め耳元で

「君を連れ去る」

キーン

バコ

なんとナルトが殴られた。

「何が・・・あの呪印は」

ルリの額に呪印が施されていた。

「あ……なた……を殺す」

キーン

ルリはクナイを取り出しナルトめがけて襲ったがナルトも応戦した。といっても、ナルトは攻撃できず、ルリの攻撃を防ぐだけだったが

「おい……あれはくぐつか」

「そのようだな」

「どうすれば元に戻る」

「封印術を使うか。」

ドン バキ ドコーン

蹴りやパンチをしただけですさまじい衝撃が起きた
代償に彼女の体はむしばまれていた。

「なるほど、体のリミッターを排除した結果あそこまで早く動ける
ようだな」

「……チツ……封印術をする暇がない」

「このままでは、彼女の方が持たないな」

「何か方法があるか」

「ない訳じゃない」

「どんな方法だ」

「といつても俺が彼女の体に乗った時にやる緊急措置のものだ」

「何でもいいから教えてくれ」

「……彼女にキスするんだ」

「……は……何言っているんだ」

「そうすれば、封印術が効果を発揮する。

ただ発動までにしばらくかかる」

「……しかし」

「あのままでは、彼女が死ぬぞ」

ドローン

と九尾が消えた。

ドローン バコーン

「分かった……て、いねえ」

数合の攻撃の末にナルトはルリの体を捕まえ

「ん……ちゅちゅちゅ……ちゅぷ………」

やっている間に封印術が発動した。

ルリの目は元に戻り、呪印の効果が消えたが、

「ん……ちゅちゅちゅ……ちゅぷ………れるお」

キスしている間にルリに夢中になっていると、口が軽く開いた。

「ナ……ン………」

ぬるつと唇より熱く柔らかい感触が唇をなぞる。

ぬるりと、ナルトの舌がルリの口内に侵入してくる。

「ナル……れる……れる……ちゅぷちゅっ……ちゅぱっ……ちゅっちゅっ」

ルリの歯列が、唇が、上あごが、ナルトの熱い舌でぬめぬめねつとりと舐めつくされる。

ナルトは、ルリの首に腕を回すと、さらに深く唇を合わせ、今度は奥に引っ込んだルリの舌に標的を定める。

たちまちルリの舌は捕えられ、からみつかれ、嘗めつくされる。ルリ自身何されているのか分からずに舌を絡められていた。

この気持ちいいのが、自分の好きな子なのだとさらに興奮した。

ナルトの唾液が行き、飲みきれなくなった分が口の端からこぼれていく。

真実を知らなければ、恋人同士の情熱的なキスシーンに見えるだろう。

「ん……ちゅ……じゅるる……コク……コク………ぷはぁ……ナル……ト……君」

たっぷりと唾液を交換した。

互いの舌先がつうーと唾液の糸でつながる。

ルリは息も絶え絶えだが、頬は上気し、目をとろんとろけていた。

「はあ、はあ、はあ、……………」

その姿にもう一度興奮しまたキスをした。

「ん…ちゅちゅちゅ…ちゅぷ…れろお

…れろ…れろ…ちゅぷちゅっ…ちゅぱっ…ちゅっちゅっ」

また奥に引っ込んだルリの舌に標的を定める。

たちまちルリの舌は捕えられ、からみつかれ、嘗めつくされる。

ナルトの唾液がルリの口の中に入り、飲みきれなくなった分が口の端からこぼれていく。

「ん〜…ちゅ…じゅるるっ…コク…コク……………ぶはあ…」

ふたたびたっぷりと唾液を交換した。

互いの舌先がつうーと唾液の糸でつながる。

思いっきり気絶していた。

「ヤバ。やり過ぎた」

ドローン

「アホだな」

「九尾。貴様・・・あとで」

「それより影分身をするぞ」

「・・・そうだな・・・やってくれ」

影分身を使用し、サクラ達のおいをたどり彼女達を洗脳した。洗脳といっても、ルリの影分身を本体だと思わせるようにした。その後、ナルトはルリを抱え九尾と共にその場から消えた。

10 (前書き)

ルリとナルトの部分は作者が暴走してしまった。

ルリにキスを済ましたナルトは

「・・・きもちよかった」

「にやけ過ぎだ」

思いっきりルリをかかえたままにやけていた。

「ルリの家から彼女の持ち物すべて持ち出すぞ」

「・・・ああ。そうだったな」

九尾の言葉で、ようやく行動を起こしたナルトがいた。とはいっても持ち物自体がそんなになかったため5分ぐらいで終わった。

「チツ・・・木の葉の奴らめ」

「ハア・・・憎しみをぶつけるなら後にしろ」

「分かっている」

で、再びナルトの術で飛んだ。
1時間後。

目を覚ましたルリは、

「ごめんなさい」

と泣いて謝っていた。

「へ……」

「ウ……ヒック……私のせいで……」

「お前のせいじゃない」

とルリをやさしく抱きしめていた。

慰めること30分。

今度は、パコパコとナルトのことを顔を赤くしながら叩いていた。

「悪かった」

「……ウツ……」

再びパコパコとたたいた。

その光景を見ていた九尾は

「その辺でやめろ。恥ずかしがるのは分かるが」

「ウツ……」

と言いながら矛を収めた。

改めて九尾は、ルリとナルトに事情を説明した。

クシナが封印にそういう風に仕組んだこと

原因は九尾の白雪姫という物語を話したことにある。

くぐつの術はルリが里を抜けたときの対処するため

「なるほど」

と双方納得してくれたのでよかった。

ルリの心の声

「白雪姫にはあこがれる。でも、お母さんせめてよく考えてから使ってほしい」

ナルトの心の声

「(母さんナイス。おかげで役得だけど、しかし封印術にそれを利用するとは)」

九尾の心の声

「(クシナ。お前バカだな)」

心の声はともかく、お互い顔を赤くしながらチラチラとみていた。

九尾は、夕飯作りに向かった。

原作道理にサクラ達は試験を突破した。

ルリの影分身越しに九尾は覗いていた。

試験を突破したルリの影分身は、キバと戦い勝つたらしい。

「キバには勝てる実力があるようだな」

「そのようだな」

試験の様子を覗きみていたナルトと九尾がいた。

ルリはというと夕飯の後。

怪我や疲労が激しいためその後昏睡状態に陥っていた。

ツッー

と九尾がナルトの腹を触った。

「・・・ギャー。痛い」

と転げまわっているナルトがいた。

そのせいで、さらに傷が痛みだして・・・連鎖だった。
10数分後

「お前。クシナ並のバカだな。あいつも好きな人間の前では我慢していたな」

と遠い目でクシナのことを思い出していた。

「・・・ハアハア・・・悪かったな」

「ルリに気づかれなくなかったか」

「……!!」

「お前の性格は母親似だな」

「……」

「ナルト……貴様も休んでいたらどうだ」

「それよりも今までのことを聞きたい」

「……いいだろう」

と言い九尾はルリの木の葉でどうやって過ごしたが話した。
やはり原作道理に話しは進んでいた。
ヒナタの怪我が原作よりかなり軽いぐらいだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7975x/>

ナルト～1回目の転生～

2011年10月26日12時00分発行